



吐
月
勺
集

上



先師より常阿婆よ又
ふと川乃舟袋あり底を
くくけ右月花の雪とつる
ふくき子親とありて
此能くなるより一能子
福むる縁よ事終る
る肉三つとて人等

さくらさくらよしのはな
あめ

睡堂可也

三十一壬寅九月

吐月句集表之部

東旦

一孝の心求むるは孝子の心
に類日と心七付は初まよ
と、能く言ふは別あさよとの
五十年たつと徳は松の心
僧もあつとやかぬつや松の
只心は海よまゝの旭の光

てなるといふと一か家士と成る事

茶才子各仙居をく名を問ん
松取多蒙よまゝに心志

人日

美茶也や梅ぬみりハ松をうと
青もといハサのぬ野うと若茶心
海中に一度よ起く茶事

初後

松よふ杖のさ流とあはれ

急ぎぬ梅さくく一俣俣

梅

紫垣に紫よ咲はあ子むめの色
梅咲や咲はやくもさくは
赤子起る中の梅はあ

樹木飛花嘆をうらなふ紫梅は
園の香や梅とさるれといつこと
似しうめ花下谷より多き垣梅は

臥龍梅

垣梅をくゞる木より一葉も梅花
あり梅やよきま山根にゆきま

雪

うらむ雪やあまの川をいさるる

雪ふは寸や短き日よふ雪は
雪ふやちいさるれと雪乃見
うらむ雪やまはるる親を

柳

雪ふは寸や短き日よふ雪は
雪ふやちいさるれと雪乃見
うらむ雪やまはるる親を

南都より

雪ふは寸や短き日よふ雪は
雪ふやちいさるれと雪乃見
うらむ雪やまはるる親を

伐株能きらん春〜〜柳の事
まろ柳やとほり約と柳の事
春柳や人主初新橋乃之
柳の中を〜〜柳と云ふ事
後ふおれ〜〜風と橋の
其の爲に〜〜松ありたるの事

江中

子心昔ふ宿つ〜〜を江中
風く〜〜残るやい〜〜は
江中をたれ江中を〜〜二月

中より凍ぬ〜〜三井の鐘
かけぬ〜〜小田の宿
そのあふ都乃中と流るる事
定哉ふ〜〜春乃水

おぼろ月

草の心もゆきよく〜 続月
おぼろおややくはよあのみ
衣る川里まけこおぼろ月

去る魚やつら〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜下りおぼろ月よ

おぼろ月よ〜おぼろ月

おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ

おぼろ月よ〜おぼろ月

おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ
おぼろ月よ〜おぼろ月よ

六曲々妻は〜

そすぬあといふ志はあやうき
雪のあやいつ下前々草の原
卯年や水鏡に数七江戸砂子
志のふ母白きと〜あ猫の志

あやあといふ歌を採〜

けいすつしとあと猫能るあは
う〜ととあすてあは〜は樂は

難い〜あは〜残る子孫をいふ
亮〜あは〜あは〜怖〜規け
大佛乃〜あは〜あは〜彼はあ
あは〜あは〜あは〜あは〜あは

曲川悼

あ〜あは〜あは〜あは〜あは〜あは
二羽つ〜あは〜あは〜あは〜あは
余は〜あは〜あは〜あは〜あは

垣跡を垣の掃ふ木の芽は

花道の人は枝木を

いし野題をいふよ

ふもとの楠よあつらん木の芽は

啼まゝの売よ終ふ田より

鏡窓やむの笑ふ山を

城

ほくろく完むる後ふ城の本

鶴まゝのうまうまを啼かす

永き目し豆姉と伸るかつか

山吹子城画多哉

是よ啼城やあよ任まら

相くまの穂ふやうしむる

糸の智みきいづそむる燕

茶の花や朝日夕日能家ゆ

いふりともぬきけ野の歌

蝶

ふふ二日老やかさの人の蝶
了ふくや鏡乃友よ入んとき
付芝ぬ先くまう見る胡蝶は

去乃見や昔人よ〜ハ橋の音
なる方日や故に語ふかみ塵

機音子葉が〜ハ新香の歌

能見巻

金沢や一葉のよ昔神
摘ま〜葉を吐のれる屋餉小
浅月子程〜つ〜子盤の取
みあま〜人よまふ離か本
か〜心〜さ〜り小田の唇
賞る〜家なる〜梅の花

海より亭人くつゆれは千世
移りてく疑乃給之は千の事
上敷入や親のいろ給を何事
心付や羽を遠き乃禱の事
月川うつるんく果るま景云

花梅

洛中へ誰りよとなくを川梅
月影を空に映や山さく

中より香やさしくよ魚能見ゆを
おあ〜やちるハち〜せえお梅
新古ありやくちきうら感る見叶
うら〜うまよ下りありやちる梅
山さく〜形もおはさひ〜い
苗枝より老木能梅さくさめん
今年能お拂ふさや夕さく
うら〜なき精をよのや山梅

杉風子所也庭より

ありて不日遠山や家さへ

中

さびしき梅枝科を留るるを

吉野京師所見候に

しるるくもあぬ理家

長途送るる

お梅ハ浪平よ定よ花の縁

ふらふらと一日をぬき見事

お梅は来てそのゆき花見は

尚よち家廻り影に花の陰

掃むるの影ぬ日とあり花見山

鏡より湖や岸一とさかり

その中に家費の花見候事

花の陰吉き瓦よりあすん

花折る女のカスミけり

白川の岸も谷のまははる
代に松を植ゑる時の一助
を頼るも一眠りも休のたま
むけしとす

種丹を種くんとは乃并な形

海棠や葉一一るくもあまひ
と梅子清一一咲くも梅のこ

やよひすむすみは川は杖をたて
木母さすりふは啼らんゆきさ
下陰を梅子ゆきさく梅のこ
名山も遠くもるやあまの花
川東や葉も花子のまふん葉
ゆくまは心とまはるりな

吐月勺集之部

更衣

櫛を糸七寸持以て去る人
更衣は月日和成定より

阿人孤羅婆沙

水山乃々々々々々々々々々
先方へ向へん、後々々々

神奈川岱眺望

山くと彩霞 袷や袖く浦

時鳥

おとまたん 志く 命を 見とる

草紙戸も 伝かり 世と あり

昔志の いろいろ 文母よ 志つ

唐紙あつ 香粧く 侍と

葉と 雲と 不かく あり 牙や 時鳥

ほろも 志と あり 命を 見とる

ほろも 志と あり 命を 見とる

月刃も 志と あり 命を 見とる

中度も 志と あり 命を 見とる

葉と 志と あり 命を 見とる

玉かけ 志と あり 命を 見とる

おとまたん 志と あり 命を 見とる

時鳥

鹿乃子 志と あり 命を 見とる

下種州見山よ訪る
尔紫家乃懐旧

月星みまゝなすのりあ紫山
空種木の足来ちくも恙紫心
朝空を覗きも嘆け紫子の気
薄時不依益乃うこく花城か
ちいさくも又後海しんり紫子

京へ去る種よかき初紫子
藤子よ急紫子急きしけく子
寺を種秋よき吉し紫子楓
実横やしと粒近き紫子の京
歴く紫家ゆめし紫子初紫子

紫子花

是を紫家うしおきやかき初紫子
今年紫下紫家うし紫子のよつり

多 隆 能 事 の 心 へ 杜 若
火 桶 へ 末 掃 取 あり 取 巻 妙

初 中

果 々 か く 事 難 才 へ 人 取 巻 の 取
探 心 や 懈 へ つ へ 事 難 へ 事

名 利 を 捨 へ 枕 へ 事 へ 事 へ
僧 へ 難 事

懈 越 へ 乃 増 質 へ 心 へ 事 へ 九 裸

初 松 魚

人 中 取 挽 へ 事 へ 心 へ 松 魚
系 釣 へ 魚 へ 事 へ 初 かつ 本
配 好 能 面 へ 事 へ 心 へ 事 へ 難

牡 丹

掃 へ 事 へ 事 へ 一 輪 乃 心 へ 事 へ
心 へ 事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 牡 丹 の 取
事 へ 事 へ 事 へ 事 へ 牡 丹 へ

花のや如牡丹花有とそらるる

聖之於家家出てんは是
灌佛や秋のしよるあをるる

浦島の古墳

老木とハ葉とくハるぬ花の
清くくよ書落しとるかん

秋

春乃穂や心とるにふく秋の音
春新や夕暮志ぬあをるる

旅中

如女や春色よゆくハ春の秋

ふふや東武路を我房よその
月日と永載し清世のいよるを
予ハ下宿し旅中しゆく

十月五日よ書成村尾を

古友女が藤葉子

繁みうき人よ死らん高柳
先住の植く急ぎし花袖は
帰帰や急来なくもむく燕
体めと此一里くや高木立
見よとて柳なるより塔の是
常とて人若く男能く書し
都より女くるとおとすわ乃花

野く急ぎ来る花影たてて春の風
北風吹来や玉とて急ぎ来るの音
かハセこの身と捨てて此浄土地
紫陽花や又急ぎ来る又急ぎけ
半乙女能く植くや急ぎ来るの松
子乙女や旭乃急ぎ来る夕日まく
み月

清草よ沈む草あまみ月

ついでに女を喜ばせる起すよ孫おれ
宮崎末子等の時しお月面
はみろやけ中よ咲きし花
さしおれや新ても儘の身と水
鼻月をく女を海へ深松子よ
いさるにさる論と先おけたの
うらなひさる

お月あつと八月見ぬ月照る日

古き代はまきし傳くおやめ

師の旧庵とみはうらうら

新増しし影七尺れは骨の末

料ももたえお乃とくちり粉小

蒸る如く砂をすゝる地を

後へ致す武多権女よ

中書寸

そなたをくわんせんと競ふ

題紀玉川

玉川や茶好日さすれぬ

伊豆熱海

茶路やうそ報も温泉乃煙
帷子や仕立てる侍子男孫子
親しむおくま習ふこゝろは
まことと各節の欠く月お水
光を照らすよとれぬ離る中

今年此命よなる時月お水
根とぬる秋風も思ふよとれぬ
多山や旅人なまゝお水の
麻糸子子老を死にや照村持
杉と木青田の中よ思ふよとれぬ
物よとす色物よとするお月想
よ草よとすくはくみよとれぬ
岸中みちく風子とすの境

心書

昔の頃一木もよきし海をたると
高き水宮よきし一花もよ
きし心樹よきし心樹よ
武蔵もよきし細みちの心
心見き心蝶をよきし
清ふ友残る心友乃き心の

心見き心蝶をよきし
清ふ友残る心友乃き心の
昔の頃一木もよきし海をたると
高き水宮よきし一花もよ
きし心樹よきし心樹よ
武蔵もよきし細みちの心
心見き心蝶をよきし
清ふ友残る心友乃き心の

下枝子鞞鞞つゝ人合歡の花
翹一可目と云けり多珍一風
不鳥や多成根すけあすつ
心ちあしゝゝゝゝみくゝ
七十余年成路一先所の
不白乃尔と譲りて

淡くやとよみぬかひの多
六月や雪あはれゝゝ富士詣

鬼灯やゝみ恋叶もあまの
葛多やまをり川乃海に盡
ゝの流汲ぬ寺ありゝるぬす

蓮子諷画巻紙

すゝゝゝ和溜と云あぬ乞子
蓮咲多涼一ちる見又涼一
淀ゆゝ出捨ゝ入ゝ子言月
夕云やぬ進たるそ枝本賣

吏登翁十七回

川骨やましく朽の花かこ

拂子の画賛

吾哉問た有と答ふ子やまのを
縁緯子かぬ裸や糸婦人
川物やあまおの母ふかま草

湖上

湖子 影のほりやまをたこ

妹と背にねえに髪と云の峯
たぐあまや梅のうこくあは月
祇園會や神代も方今に京

春日まき

よろろくとあまの小麻に暑か
月かおと知人あまをすこ
一休乃之病涼一圍乃月
きすすー外てまの搦里のろ

老師の臨河子詠詩と送子

関も今戸さうて涼し清見哉

伊豆山より

去る涼や温泉と知なるる春涼

蕪々おちき人の風あそ涼の心

之像達と人形画鏡

すーさや九年あそくー三の

後好いと問き聲こ夕すこ

子とともぬま婦あこまの涼

江の島

島すー波引きと来るを

鑑みとあそ摺きや夕涼

鏡乃眼のいと川流影清心

いとすちハちの中川清水が

歌代乃裸成なれちるーう歌

就きのちねかよふやせの岸つさ



